

児童の発達段階を意識した生活科での探究指導のあり方

- 【研究代表者】 谷尻 治 (和歌山大学教職大学院)
【共同研究者】 田中伸一 (和歌山大学教育学部附属小学校)
 上田 恵 (有田川町立小川小学校)
 赤松広志 (和歌山市立雑賀小学校)
 丸田翔子 (和歌山市立西脇小学校)

1. 共同研究課題について

『探究的な学びを進める授業づくり』

児童の発達段階に応じて、探究的に学び続けていくことができ授業を実践するための授業・単元作りを検討及び検証していく。特に、探究的な学習過程を繰り返す指導のあり方に焦点をあてる。

- ・「主体」の姿として、自分たちの思いの実現に向けて直面した問題に試行錯誤しながら粘り強く学習に取り組む姿を目指す。
- ・「活用」の姿として、実際に体験したことや飼育員と関わる中で気づいたことを活用し、問題の解決に取り組む姿を目指す。

児童の学びの質を丁寧にみとることで、発達段階に応じた指導のあり方を本研究の成果を示したい。

2. 今年度の活動

共同研究メンバーの主な活動は次の通り。

- 8月22日 附属小学校にて事前検討会
- 10月21日 附属小学校にて事前検討会
- 10月29日 附属小学校にて開催の「秋の教育研究発表会」・生活科公開授業と研究協議会
- 11月28日 附属小学校にて生活科の授業参観

3. 共同研究者実践概要

単元名『ふわみちゃんとZOOっと!』

実践者：田中伸一（和歌山大学教育学部附属小学校2年B組）

＜単元の目標＞

- ・自分たちが「楽しい!」「大好き!」と感じる動物園には、その楽しさを支えてくれている動物や人々（飼育員）がいることに気づくことができる。
- ・動物園探検や動物の飼育をとおして、飼育員と関わる中で飼育員の動物に対する思いについて体験したことや気づいたことなどをもとに考えることができる。
- ・動物園に関心を持って見学し、動物園に関わる人々との交流を深めたり、親しみをもち関わろうとしている。

4. 学習の記録

※○数字番号は児童の出席番号

(1) ムダにならない命のリレーを目指して!

2学期が始まってすぐに次の野菜を植えたい気持ちでいっぱい2B。しかし学級園を見て、「雑草

がとても元気に育っている。」と感じた②と⑱たち。⑤が「本当は雑草畑になっていることに気づいていたけど・・・1人じゃできないから諦めていた。でも、みんなで協力してやりたい。次の2年生が気持ちよく使えるようにきれいにしていきたい。」、⑳「次の野菜を育てられるように2B畑を取り戻したい。みんなの畑も取り戻したい。」という目標に向かって取り組んでいく計画を立てた。



図①雑草だらけの現状を実際に把握する。

積み重なっていく雑草を見て「何かに使えないかな？」と考えている人たちがいた。そこで雑草についてみんなで話し合ってみた。

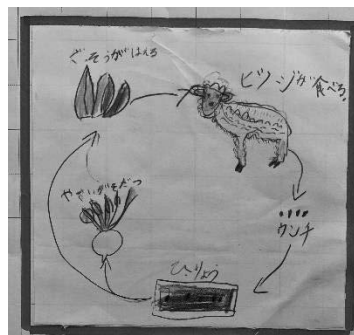
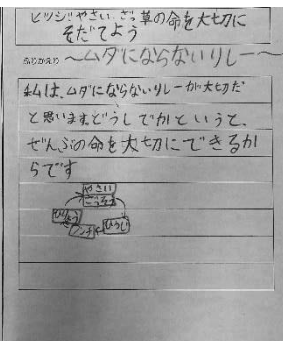
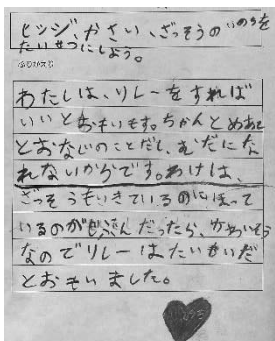


図②雑草抜きをとおして、気付く。

㉓と⑪「野菜の立場から考えると、雑草は抜いてほしい。イヤだ!」、⑫「雑草の立場から考えると、抜かないでほしい。」、⑳「だって、生きているから。」両方の立場から考えると野菜にも雑草にも「命」があるということが見えてきた。⑲「雑草の命も無駄にたくない!」、⑮「雑草の命を大切にしたい!」とそれぞれの思いを話すと、⑭、⑳「動物のエサにしたい!」とアイデアを伝えた。「ヒツジを飼うと、雑草の命が無駄にならないし、秋冬野菜も元気に育てられる!」

ヒツジの飼育に向けて各自が調査した情報をクラスで整理した。

①そうじ②エサ・水③ウンチ④ヒツジのストレス⑤看板作り⑥日記に取り組むことが決まった。㉓「ヒツジ、野菜、雑草は回ってる!雑草はじゃまだけど、ヒツジのエサになって。ヒツジのウンチは肥料になって野菜や雑草を育てる。野菜は自分たちが食べる。」、⑥「本当だ!リレーみたい。」と話すと子どもたちに大きな反応があった。そこでクラスでの目標を話し合った。㉘「命を大切にしたい。」など1つ1つの命をキーワードに、「ヒツジ、やさしい、雑草の命を大切に育てよう〜ムダにならないリレー〜」を決め、さらに学習を進めていくことになった。



図③ふりかえりより。子どもたちが考える命のリレー。

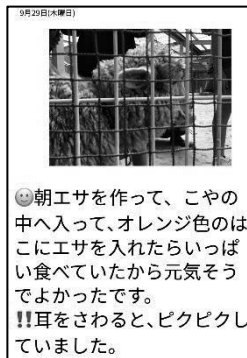
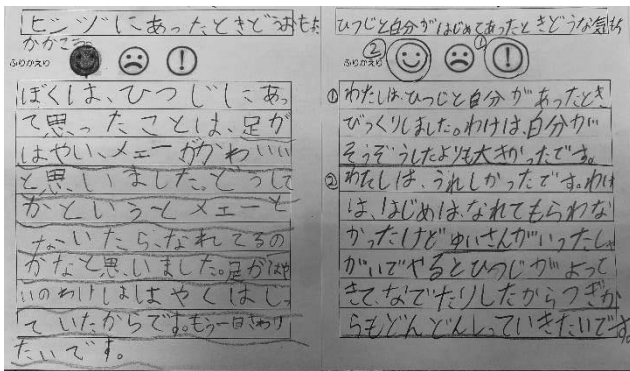
(2) ようこそふわみちゃん!

待ちに待ったヒツジとの対面の日である。教室で初対面の感想を聞き整理すると、

- ㉙「可愛かった」⑭「慣れたかな?触れた!」⑳「触れて嬉しい!」
㉚「僕は触れなかった。ヒツジが慣れてくれたら触りたいけど。」

⑥「ヒツジと友達になりたい！ヒツジの気持ちになって・・・しゃがんで、ヒツジの目の高さになって、さわるようにしよう。」

と困ったところを解決しようとする姿が見られた。



図④毎日のふわみちゃん日記とふりかえり。

「毛がふわふわしているから・・・」「メーって鳴くから・・・」など観察した特徴から思い思いの名前を考え共有した。名前は、最終的に「ふわみ」に決定した。

(3) ふわみちゃんのスプレスを減らそう～散歩コース編～

毎日ふわみちゃん日記をつける中で、ふわみちゃんの変化の様子が分かってきた。動物園と違い狭い小屋の中で過ごしていることに気付いた。子どもたちは協力してふわみちゃんを外に出してあげたが、ふわみちゃん共に歩く中で危険がたくさんあることに気付いた。

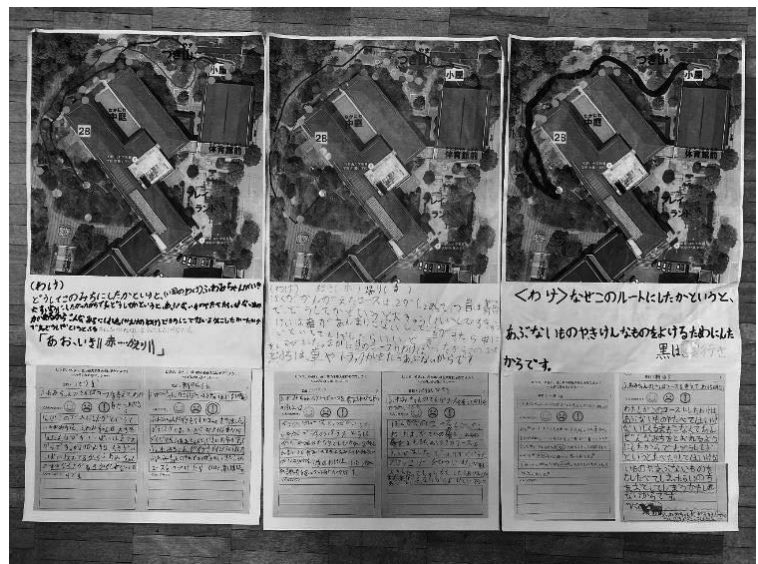
⑤「道路は車が通るから避けた方がいい。」

⑭「でも、校舎の周りは、鉄の板（側溝）があるから、ふわみちゃんの蹄が傷ついたり痛いかもしれない。」両方の考えに納得しつつ、実際に危険な箇所がないか調査に行くことになった。

⑳「思っていた以上に危険な箇所が多かった。22か所も見つけた。」とふりかえりを話した。



図⑤散歩コースの選定の様子。



(4) ふわみちゃんのスプレスをなくそう～ふわみちゃんのために～

ふわみちゃんが太ってきていると感じた。飼育環境などまだまだ改善できるのではと考え、近くの和歌山城動物公園に調査に行くことにした。

調査したことや毎日の日記をもとに、ふわみちゃんが太ってきているという事実から、原因を考え、話し合った。話し合う中で「ふわみちゃんエサをあげて嬉しい。」という2Bの気持ちや、ふわみちゃんがエサをもらおうと「嬉しい。」というお互いの気持ちを確認することができた。そして、更



図⑥入園早々、飼育員を見つけて質問している姿。

に「お互いの気持ちと同じ。だけど・・・とお互いの気持ちより大切な「ふわみちゃんの健康、そして命に係わる問題につながっていくかもしれないと気付いていった。「お互い同じ嬉しい気持ち。だけど。」から1人1人が「お互いの気持ち」も大切だけど「命や健康を守ることの大切さ」という視点で今後に向けて考えることができた。

(5) ふわみちゃんともっと仲良くなろう

もっと一緒に過ごしたいという思いが膨らんできた。授業中も休みの日もふわみちゃんと一緒に過ごしたいという思いの実現に向けて、土日のお世話についてや一緒に授業ができる環境について考えた。



図⑦授業中のふわみちゃんの居場所と関わり方の様子。

図⑧休みの日のお世話の様子。

(6) みんなに届け！ふわみちゃんの魅力！

国語科「馬のおもちゃの作り方」の学習で本文を読んでみての2Bの感想から・・・

②「ふわみちゃんを作りたい！」

①「ふわみちゃんが作れると附属小のみんながふわみちゃんのことが好きになる！ふわみちゃん大好き大作戦が進むことになる！」

⑮⑱「国語+図工+生活+算数(長さを測定するから)の合体の授業になるから、ずっとふわみちゃんの勉強ができる!」から、めあてをふわみのおもちゃの作り方を説明しよう!に決定した。



子どもたちの工夫ポイント

- ①ふわふわ感を出す綿。
- ②ひづめ
- ③エサを食べるときに草がつく顔

図⑨馬のおもちゃと、ふわみちゃんのおもちゃ。

今の2Bのみんなにとっては、どんな教科の勉強も「ふわみちゃん」と関連付けて学習できそうである。色々な教科をとおして学ぶことが、自分たちの「ふわみちゃん大作戦！」に繋がっていくことに気付くことができた姿をみることもできた。

(7) 2B飼育員ユニホームを作ろう！

⑭「2B飼育員と分かってもらえていない。」と困ったことを話した。

⑮「(2B以外の)自分たちも触りたいから、『2Bが触れていいな!』という羨ましい気持ちが、ずるいって気持ちになってると思う。」

解決するために・・・

②「2B飼育員と分かる服を作りたい！」

そこで、自分たちが飼育員さんとすぐに分かった理由を考え、必要なことは「2B」、そして自分たちの名前であると結論付けた。そして、それぞれが思い思いのデザインを考え出した。

みんなが選んだデザインの良さを話し合うと

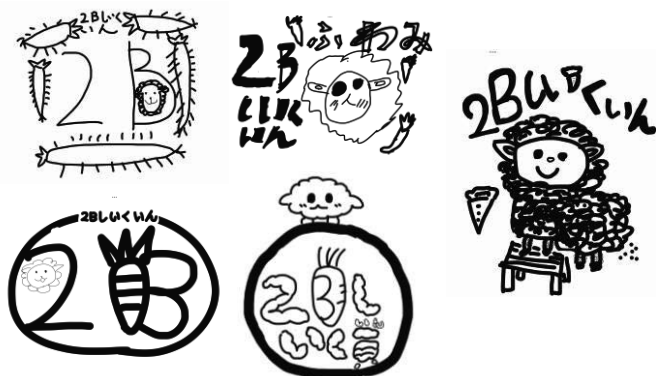
⑤「ふわみちゃんのオリジナルキャラを考えているから。」

⑭「ふわみちゃんがニンジンを食べているところが伝わるから。」

⑯「2BのBをニンジンに工夫している。」

⑪「ふわみちゃんがニンジンが大好きなことが伝わる。」

などたくさんの選んだ理由をもとに、2Bオリジナルのロゴを考え、ユニホームに印刷することにした。



図⑩ 1人1人が2Bユニホームのロゴを考えました。

5. 本実践の成果とその背景

田中教諭らとの共同研究を始めて3年目となる。毎年感じることであるが、共同研究メンバーによる事前検討会がその後の実践展開を大きく変えていくという点において、言い換えれば、メンバーの助言を真摯に受け止めて元の構想を大胆に変えていくという点において、田中教諭は「実践者はこうあるべき」という姿を見事に体現されている。今年度の『ふわみちゃんとZOOっと!』の実践も、当初の予想を遙かに上回る児童の学び続ける姿を生み出している。その要因を2点に絞って整理する。

(1) 「ホンモノ」に出会わせ、格闘させる

和歌山城動物園やひつじのレンタル先であるワールド牧場を児童と訪問し、飼育員の働く様子を間近で見学させ、様々な質問を通して児童がもつ「？」を解消していく……。田中教諭は、そういった「ひと」「こと」との出会い合わせ方が上手であるのはもちろんであるが、ここで強調しておきたいのは、動物の飼育を大胆に取り入れたことである。これまでも田中教諭は常に児童を「ホンモノ」に出会わせることを大切にした実践を展開していたのだが、今回は「2年生の児童が動物を飼育することが出来るのか?」「出来るとしたら、どんな動物か?」と飼育については躊躇していた。しかし、事前検討会でこ

の点が大きな論点となり、協議を通して「ホンモノ」を飼育することでこそ、児童は動物園の飼育員の苦労や思いに迫ることが出来るのだと共有した。2年生であるという発達段階から、飼育する動物は小動物が妥当かと思われがちだが、検討会では「体温を感じられることが大切」「配慮は必要だが、ある程度の大型ほ乳類が適切」との助言を受けて、ひつじの飼育にチャレンジすることとなった。実際に飼育を始めると、やはりウサギやリスといった小動物の飼育では感じられない満足感を児童は得ると共に、飼育にあたって次々と浮き上がってくる課題に直面することとなり、児童が全員で全力あげて考え協力しないと動物の命を守れないということが実感出来ることとなった。

(2) 児童の意欲に火をつける

田中教諭は、児童の探究活動に火を付けるのがうまい。大型の動物は飼育小屋で飼育をするものと大人は考えがちだが、ある日、ひょっこりと2Bの教室を訪問すると、教室のすぐそばにひつじのふわみちゃんが繋がれていた。めえーと鳴き声をあげることもあるが、ひつじも児童も落ち着いていて、ふわみちゃんにとってこの場が安心出来る場であることが一目で理解できた。ひつじを飼育することが児童の生活と密着しているのである。

散歩コースを検討して色んなルートを開発する。休日も児童が自主的に登校してお世話をする。こういった一連の活動を進めながら、ひつじがストレスを感じていることをその状態からつかみ取らせ、「ふわみちゃんのストレスを減らすには？」と課題を設定する。国語科で学んでいる馬のおもちゃ作りを發展させ、ふわみちゃんのおもちゃを自由な発想で創作させる。また、飼育している際に他学級や他学年の児童らが、2Bの児童が飼育する様子を見に来て「2Bだけ飼育してずるい」といった思いを持っていることから、飼育は仕事として行っていることで「自分たちは2B飼育員である」ことを示すために、ユニホームを作ろうという声を引き出し、実現させていく。これら一連の流れは、探究のプロセスを見事に歩んでいるのだが、おそらく児童らは「学んでいる」という感覚ではなく、「遊んでいる、楽しんでいる」という感覚ではなかろうか。これこそ、発達段階を意識した生活科の王道を歩んでいるといえよう。

6. 最後に

この3年間、コロナ禍が影響し、学校現場では学習を進める上で様々な規制がかけられた。一方、若手教員の増加や学校現場の困難さから、「足並みを揃えて」という教育のスタンダード化が進んでいる。自由な発想で児童の交わりや学習を推し進めることが重視されず、結果的に人との関わり方を十分に学べないまま、あるいは人との関わり楽しさを十分に味わえないまま、少年期へと入っていく児童の実態がある。学校が以前に比べ「楽しいと感じられる場」でなくなっていること、「窮屈な場」となっていないか、教員は常に自問自答することが必要である。

田中教諭の実践は、まさにこのスタンダード化とは相容れない道を手探りで切り拓いている。その最も重要な点は、教師自身がワクワクしながら学習を進めていることである。このワクワク感そのまま児童のワクワク感＝探究心に繋がっていく。「この子らは、(問題が多くて)アカンなあ」と嘆く前に、ここで紹介したような、児童の心に火を付ける学習が組めているのか、指導に行き詰まりを感じている教員にぜひ参考にしてもらいたい実践であることを強調しておきたい。